W校中高等部だより

のみの市特集

令和五年（２０２３年）十一月十一日

ニューヨーク補習授業校ウェストチェスター校



十一月十一日に中高等部主催の「のみの市」が開催されました。九月二日には第一回のみの市委員会が開かれ、そしてその日からのみの市委員を中心に、今年度の生徒会の本年度のテーマ「一期一会」を合言葉に、中高等部全員がそれぞれ一人ひとりが力いっぱい活動してきました。

今年は、中等部一年生・二年生・三年生・高等部一年生・二年生による五つのグループに分かれてブースを出し、各学年とも幼児部初等部向けのゲームコーナー、各家庭から出品していただいたバザーコーナー、保護者の方々からなるベーク製品コーナー、そして生徒たちのアイデアを凝らした食べ物コーナーに分かれて出店しました。

九月から始まったのみの市委員会では、最初に収益金の寄付先を決定しました。今回の寄付金は、日本の「あしなが育英会」に送ることになりました。二か月の取り組みで、各クラスの出し物を決定したり、幼児部初等部向けのゲームを決めたり、各出し物の担当者を決めたりと毎週忙しく会議を重ねてきました。

出展内容がなかなか決まらなかったり、細かな点で意見が合わないことがあったりといろいろなドラマがありましたが、思いは一つ、できるだけ寄付金を集めようと、「常に全力」で取り組みました。

「のみの市」の会場となった大ジムでは、保護者の方々による準備から始まり、十二時少し前にはすべての準備が整いました。午前十一時四五分に、幼児部のかわいいお友達が来場したところから会場内は緊張感が広がり、「のみの市」の雰囲気が高まりました。幼児部の幼児たちは、色々なゲームやお店の売り物に目を奪われながら、買い物を楽しみ、十二時二十分からは六年生と交替。さらに十二時四五分からは、初等部の保護者の方々や生徒の皆さん、卒業生などが来場し、一時は身動きが取れないほどの混雑ぶりになりました。すべての生徒が忙しく体を動かし、お客様のために最高の笑顔を作り、「常に全力」で一生懸命頑張っていました。

計画に大きなずれもなく、「のみの市」は無事終了し、保護者の助けを借りながら後片付け、そして各クラス会計担当による集計も終了しました。最後に当日の売り上げ総額の集計結果が５８００ドルと発表され、この金額に生徒たちはからは達成感とともに感動の声が上がりました。

「のみの市」当日、また「のみの市」開催に至るまでの過程で色々とご支援いただきました保護者の皆様方には心から感謝申し上げます。



のみの市

中等部一年一組　モア　リリアン

私にとっては、初めてののみの市でした。最初は、のみの市が何かもわかりませんでした。でも、きちんとクラスで説明された時から、すごく楽しみにしていました。どこにお金を寄付するかの話し合いで、「去年と同じところが良い。」と言う人もいれば、「今年は、人間じゃなくて、動物に寄付しようよ。」と言う人もいました。すごく難しい決断でしたが、最終的に、「足長育英会」にお金を寄付することになりました。当日５８００ドルを集めることができました。少しでも日本にいる困っている誰かのためになると思うと、とても温かい気持ちになりました。

私のクラスは、かき氷か、たこ焼きと焼きそばを売りたいと言う意見が出ました。かき氷の方が、人気があると考えて、かき氷を作ることにしました。私は、かき氷機を持っていたので、かき氷係になりました。



ゲームは、ワニたたきと射的をすることに決めました。ワニたたきは、作りにくいと思いましたが、じょうずに出来上がりました。射的は、係の人がお家で作ってきてくれました。

のみの市の準備として、ポスター作りもしました。誰がどのようなポスターを作るかを決め、協力しながら、グループでポスター作りをしました。準備の中で、ポスター作りが一番楽しいと思いました。

のみの市の前の日、学校がお休みだったので、頑張って、母と一緒に、のみの市の準備をしました。ベークセールもすることを聞いたので、私は、バナナブレッドをやきました。少し大変でしたが、上手にやけた時は嬉しかったです。のみの市の朝、ボランティアで一時間も早く学校に行きました。友達と一緒にのみの市の準備をして、ワクワクしてきました。

やっとのみの市が始まって、幼児部の子供達が入ってきた時、ちょっときんちょうしました。「これがほしいです！」と話しかられた時、笑顔で私は「楽しんで使ってね！」といいました。お昼ご飯の後、お客さんが四倍ぐらいになり、かき氷を作り始めました。同時に三つも注文をもらった時もあったので、ちょっと困りました。その上、私が使っていた機械が壊れてしまい、すごくやりにくかったです。作り終わったら、手が赤くなってしまいました。でも、とても楽しい思い出を作ることができました。

なんだかすごく、幸せでした！



蚤の市

中等部一年一組　中川　航

今年ははじめての蚤の市でした。色々とわからないこともあったけれど楽しかったです。準備は時間配分や、使う材料などがわからなかったため、もっとテキパキとできたなと思いました。また、クラスメートと協力もできたことはとても

よかったと思います。値段設定も割とすんなりと決めることができた上、みんなの意見を聞いて納得することができました。

そして、本番の時、足りないものが見つかりました。ものの強度や、具体的なルールがなかったりしました。また、かき氷を入れる容器がなくなってしまいました。でも、よかったこともありました。ワニ叩きは幼児部に、射的は一般のお客さん達にとても喜ばれて、長い列が出来ていましたし、ベイク品や、雑貨も思いの外売れ、よかったと思いました。

初めての蚤の市で、緊張したりしていたけど、全体的にとても楽しかったです。

のみの市の思い出

中等部一年一組　　森田　絢音



今年ののみの市は私にとって初めてでした。体育館の中にたくさんのお客さんが来てくれて驚きましたが、そのおかげで多くの寄付金を集めることができました。もちろん、準備や当時のかき氷作りなど大変なこともありましたが、クラス全員で楽しむことができたと思います。

準備を始めたのは、のみの市の数週間前です。私にとって、準備で一番楽しかったのは、ポスター作りです。いつも話さない人と一緒に作れたので、相手のことをもっと知ることができました。また、このおかげで、その後の作業をスムーズにできました。

当日は、まず午前中に、幼稚部と初等部六年生の生徒が来てくれて、彼らと話すことが新鮮でした。なぜなら私たち中学一年は、中等部、高等部の中で一番下の学年ですので、私たちより小さい子達と話すことはあまりないからです。このような行事はそのような生徒と話せる数少ない時の一つで、私にとっては初めてでした。普段同じ年齢の人としか話さないので、最初は、どうすれば相手に分かってもらえるか全くわからなかったのですが、周りのクラスメイトがゲームの説明をしているのを見て、お手本にしました。

午後からは、多くの一般の方々が来てくれて、かき氷の行列ができました。最初は列の整理ができていなかったり、かき氷作りが追いつかなかったり、お金の受け渡しに手間取ったりなどと、大変でしたが、ボランティアの保護者に手伝ってもらい、解決することができました。

私たちは、のみの市で接客するのは初めてでしたが、とてもよい経験になりました。来年は今年あまりできなかった列の整理や、お金の受け渡しを責任を持ってできたらいいと思います。

この行事を通して、私たちはいつもよりもっとクラスとして団結できたと思います。私も団結することの大切さを感じました。例えば、ポスター作りやかき氷作りの時です。ポスターは、みんなで頑張らないと時間が足りなくなってしまい完成させることができません。かき氷を作る時は、バラバラだとお客さんを必要以上に待たせてしまいます。まだ転校して来て間もないですが、今後もクラスメイトと楽しく過ごしたいと思います。



努力の先に見えたものは

中等部二年一組　　佐久間　彩華

蚤の市前日の夜、私はドキドキしていてとても緊張していました。ポスターやゲームの準備は完璧だったので、去年の蚤の市を思い出していると気持ちは少しずつ楽しみに変わっていきました。

蚤の市当日、幼児部がジムに入場すると、ちょっと前まで静かだったジムが、一気に活気であふれてきました。私は早速おもちゃがたくさん入った箱を運び、しゃがんで幼児部の生徒にたくさん売りました。ほんの五～十分しかたっていないかのように感じるほど、あっという間に時間が過ぎていました。そして次に六年生が入ってきました。六年生は幼児部の真逆のようで話しかけにくかったのであまり売ることができませんでした。勇気を出して話しかけてもうまくいきませんでした。年齢も上がってくると緊張がお互いに伝わり、会話を弾ませるのは難しいと感じました。来年はまた挑戦して頑張りたいと思いました。



ようやく、一時近くになると一般の人が入場してきました。私は最初は雑貨売り係でしたがジムには最初は人が少なかったので私は校内を歩いてぬいぐるみを売ることに決めました。ちょうど幼児部や小学生の授業が終わったころだったので、廊下に出ると雑貨は一気に売れました。この時に私は一人で雑貨を売りに行っても楽しいということに気づきました。ジムへ戻ると、元のスケジュールが変更していてベーク品を売ることができませんでしたがゲーム係として活躍することができました。休憩の時間にはランチを食べてから妹のかき氷を買いに行ったり他のクラスの出し物を見て回りました。

今年の蚤の市では去年と違ってクラスのみんなとコミュニケーションを取り合う事ができて上手くいきました。ゲーム係や雑貨を売っているときには幼児部や小学生の笑顔を見ることができてとても感動しました。そして私が幼児部や小学生だった時に、蚤の市で好きなものを手に取り、買い物をすることがとても楽しかったという事を同時に思い出しました。忙しい一日でしたがまた来年も皆の笑顔が見れる事を楽しみにしています。



有意義な一日

中等部二年一組　　岩﨑　咲奈

蚤の市は、楽しかったとは言い難いほど忙しかったです。しかし、蚤の市を通して私はたくさんのことを学びました。

当日、私のクラスは、みんなが全部の役割を担当できるようにローテーションの方式でやりました。私の初めの役割は袋に入ったポップコーンをカップに入れるという単純な作業を繰り返すだけのものです。しかしこれが意外に厄介でした。なにしろポップコーンは軽いので、袋を傾けてカップに移し替えようとするとぽんぽんとカップから逃げていきま

す。なんとか飛んでいくのを抑えようとしましたが、結果は完敗。気が付いたらテーブルの上も地面もポップコーンだらけになっていました。次は十五分の昼休憩ですぐに雑貨係になりました。私はおもちゃの売り歩きを任されましたが、それにはまた違った大変さが待ち受けていました。買ってくれそうな子供を見つけても勇気がなく、話しかけるのをためらってしまい、結局逃してしまうということが多かったです。おどおどしているうちに役割交代の時間が来てしまいました。その後は疲れ果てながらも他の役割もして、やっと蚤の市が終わりました。



私は今まで、お金を集めて寄付することだけが蚤の市の目的だと思っていました。しかし、生徒が接客や作業などを経験して、働く練習をすることも目的の一つではないのかと気づきました。私は今回の蚤の市で、食べ物を効率良くできるだけ散らからないように用意することの難しさや、商品を売ることの大変さを痛感しました。また、社会に出るのにおいて、よく考えたり、勇気をもって挑戦する力を身に付ける必要があることを学びました。次はこうしたらもっと良くなるのではないか、とよく考えて来年の蚤の市に臨みたいです。

初めてのタピオカショップ

中等部三年一組　　冨岡　せりな

今年ののみの市はコロナ以来禁止されていた飲み物や食べ物を提供できることになりました。クラスのみんなと相談してタピオカティーを販売することにしました。みんなで協力してポスターづくり、材料集め、ゲームのアイデアなども毎週考えました。その甲斐があって、ゲームはみんな楽しんで、タピオカティーも美味しいと喜んでもらえました。

中学一年と二年の時ののみの市は、ベーク品の販売とゲームしか出来なかったので、あまり準備は必要ではありませんでした。ですが今年は、飲食物の提供があるので、仕事の分担など決めることがたくさんありました。まず始めに、何を作って売るかクラスで相談をしました。他のクラスの出し物を聞いて、食べ物を出すクラスが多かったため、飲み物を売ったら人気になるだろうと思ってタピオカティーに決定しました。けれど、タピオカを作るためにはちょうど良い甘さのレシピの研究だけでなく、お金も気にしなければいけませんでした。

何回も分量を変えてタピオカティーを作って、一番お金がかからず、美味しくなるレシピを考案しました。普段お店で買うタピオカティーは、どうして五～六ドルもするのかが疑問になっていました。けれど、自分で材料を集めて見ると、思ったよりお金がかかることに気づきました。美味しくて安く作れるタピオカのレシピを作るのは



大変でしたけど、みんなが味見して美味しいと言ってくれたときは嬉しかったです。

出し物以外も、クラスの全員が頑張って準備を進めました。蚤の市の前の日、みんなミルクティーやベーク品などを作りました。当日の朝は六時に起きて、タピオカを茹でて、荷物を朝早くジムに持って行きました。実際に蚤の市が始まって、クラスメートたちと一緒に働くのが楽しかったです。去年よりも来場者が多く、できるだけ速くタピオカを作らなければいけませんでした。でも、みんなで効率よく動いて、お客さんを待たせることはなかったです。そして、タピオカティーはすぐに売り切れになりました。

友達や先生がタピオカティーを褒めに来てくれて、努力が報われた気分でした。でも、「のみの市」での一番の成果は、企画から当日までの間に、クラスメートとの絆がどんどん強くなっていったことです。来年の蚤の市も楽しみにしています。

皆で頑張ったのみの市

中等部三年一組　粟飯原ーワイス　寿利

今年ののみの市は、去年からまたレベルアップして、ベーク品以外の食べ物が売られるようになりました。自分が小学生だった時に見たように、現場で作って出すのはとても楽しそうだと思いました。

限られた授業時間での話し合いや準備は少し難しかったです。多数決の結果、私達のゲームはミニバスケ、食べ物（飲み物）はタピオカに決まりました。他のクラスの出し物も考えると、ちょうど甘くないサンドイッチと他の甘い食べ物、プラス飲み物があって完璧だね、と皆納得がいったようで良かったです。

しかし、タピオカは思っていた以上に計画や準備が必要でした。何人分作るか、誰が何を用意するか、どうやって当日は冷やしておくか…　懇談会の日、保護者の方々と先生も考えてくれました。のみの市委員は材料の値段を調べてくれたりして、一人はレシピを用意して試飲用に作って来てくれたりなど、学校外の時間をたくさんとってくれました。皆のアイデアを実現させた人達にとても感謝しています。

のみの市の前日、雑貨に値段をつけながらワクワクしているのは私だけではありませんでした。「明日楽しみ！」と妹はその日二回くらい言っていました。期待してくれるのは嬉しかったのですが、ほんの少し緊張しました。妹は今六年生で、お客さんとして参加するのは最後の年でした。来年は彼女もクラスTシャツを着て商品の後ろに立っていることを考えると、なんだか変な感じですが、お手本になれるように頑張りたいと思いました。

そして土曜日の当日、中高生は重い荷物を持って、でもテンションは上げて、登校しました。私がジムに入った時はすでに品物が並べられていて、雰囲気が出ていました。短い授業の後、幼児部と六年生が来る時間になりました。ゲームに誘うのは少し難しかったけれど、皆結構上手に下級生と接す





ることができたと思いますし、買い物に来た子達にも楽しんでもらえたみたいで良かったです。

一般の方の時間になると、私のグループは早速タピオカのシフトに入りました。まだあまり人が来ていない間に何人分か作り始めたのですが、いつの間にかすごい人になっていました。私は会計係だったけれど、タピオカをコップに入れて、お茶を注いで、ふたを閉めている人と同じぐらい忙しく感じました。値段をお客さんに教えて、お金を受け取って、必要な時はおつりを数え、「好きなのを取ってください」、を繰り返して、写真係の一人だったのに私はそんな暇などない感じでした。

しかし、シフトが終わって雑貨に移ると、一気に売るスピードが落ちました。タピオカのためには行列ができていて、とても人気だったようで嬉しかったです。このすきに、写真も色々撮ることができました。

気付くと人混みはだいぶ減っていて、のみの市はいつものようにあっという間に終わってしまいました。片付けをした後、合計金額を聞いた時は（またいつものように）びっくりしました。今年ののみの市も、大変なところもあったけれど、タピオカもゲームも、全て大成功で、楽しい思い出になりました。

のみの市

高等部一年一組　二階堂　健

今年ののみの市は、寄付先のためにたくさんのお金を集めることができました。歴代で一番かせぐことができました。このお金を集めるためにはたくさんの工夫や努力が必要でした。このお金を集められて大成功に終わった理由は二つあります。

一つ目は、クラスのみんなの努力で今年ののみの市を良いものにすることができました。ポスター作りやゲーム作り、当日のベーク品作りなど、のみの市の全てにみんな投入して、学校でも家でも頑張って取り組みました。クラスのみんなが各役割をきちんとやってくれたので当日のその時間になったら、みんな心の準備ができ良いのみの市にすることができました。

二つ目は、先ほど言った準備への努力だけでなく、本番でみんなの力が明らかに発揮されたことでした。当日のみの市では、多くの人や、たくさんのお客さんが来てくれて大変でした。それでも、各グループリーダーはきちんと時間を守り自分達のステーションに行くと、その役割をみんな見事にやり遂げていました。これでお客さんも自分たちも誰もが楽しめるのみの市になったと思います。





この二つの理由で今年ののみの市は楽しかった去年ののみの市よりもさらに楽しくでき、たくさんの人が来てくれて、寄付先のために多くの寄付金を集めることができました。来年ののみの市はそのお手本になれるようなのみの市でした。来年も楽しいのみの市にしたいです。

のみの市

高等部一年一組　　佐久間　広幸

２０２０年にコロナが流行して以来、蚤の市の楽しさを忘れていました。先生から聞くとコロナが広まってからの初の本格的な蚤の市でした。蚤の市は今年の高１での最高の経験でした。学校についてから一日中、蚤の市のことばかり考えていました。ときにサンドイッチを売るのが楽しみでした。

蚤の市が始まるとジムがいきなり幼児部でいっぱいになりました。私のチームはゲームの担当だったので子どもたちが遊びに来るとすぐに忙しくなりました。私自身は遊んでいませんでしたが、子どもたちを励まし、一緒に勝利を喜ぶのが楽しかったです。私達のクラスが考えたゲームで子どもたちが楽しんでいるのを見てやりがいを感じました。ゲームをする子どもたちが少なかった頃は、チームメイトとも楽しくプレーしていました。一時、私のチームは雑貨の手伝いとベーク品の手伝いに切り替えなければならなかったが、その後はゲームの手伝いに戻ることができました。そのうち、ゲームの売店を切り盛りするのが楽しくて、自分のランチ休憩の時間だったのに気づかなかったこともありました。

昼休みが終わってもゲームの売店をやっている人がいなく、手伝いが必要なチームがいると私は喜んで手伝いました。私達が出した賞品はゲームの大きなセールスポイントでした。ちょうど僕がゲームの手伝いをしていると小学生の子供が二人で ゲームで遊ぶのを聞き、ゲームに熱中していました。二人が賞品を選ぶときに私達の景品箱の中にお揃いのブレスレットを見つけてとても嬉しそうでした。このとき、私は疲れていたのですが、この二人の様子を見ていると仕事を続けようというモチベーションが湧いてきました。

今年の蚤の市全体を通して、私はたくさん働きましたが、私はゲームを一番楽しみました。ゲームでたくさんの子どもたちを喜ばせることができて来年の蚤の市を楽しみにしています。

最後ののみの市

高等部二年一組　　岩﨑　莉奈

私は今、のみの市の余韻に浸りながらこの作文を書いている。私にとって最後ののみの市は最高のものとなった。それはなぜか。最高の仲間がいたからだ。

今回は最高学年という責任が伴い、しっかりと仕事をこなさなければいけないということはもちろんわかっていた。しかし、のみの市の一週間前、みんながそれぞれ自分でできることを見つけて取り組んでいる中、私は何もしていなかった。クレープの材料や前日に集まる計画などについて着々と



進めており、先を見据えて早いうちから行動に移しているみんなの姿を見て、私は焦りと申し訳なさで頭がいっぱいになったし、普段いかに自分で考えて行動していないかを痛感した。しかし何もしないのが一番いけないと感じ、私にできることを精一杯頑張ることを心に誓った。

みんなの計画的な準備や保護者の皆さんの協力によって、のみの市の前日、クラス全員で集まってクレープ作りをすることを実現することが出来た。たまたまその日は祝日でほとんどの学校が休みだったこともあって、私達は早めに集まってクレープ作りを始められた。生地を事前に作っていただけたことと、早めに集まれたことが功を奏し、私達は想像以上に早くクレープを三百枚以上焼き上げた。だが私達にとってここからが問題だった。沢山焼き上げられたことは良かったが、焼き上げた後それら全てにトッピングを追加し、包装しなければならなかった。想定していた以上のクレープの枚数に、トッピングや包装紙が足りなくなるなどハプニングはあったが、みんなで役割をしっかりと分担して協力し合えたことによって、日付をまたぐ時間までには、なんとか包装まで終わらせることができた。クレープを完成させるまでの作業は思った以上に大変で眠気と戦いながらだったが、だからこそ完成したときの達成感は大きかった。

そして迎えたのみの市当日。私達が一生懸命作ったクレープが見る見るうちに売れていく様子やゲームを楽しんでいる人々の姿を見て、私達の頑張りが誰かの楽しみに繋がった瞬間を感じた。私達のクレープはあっという間に完売し高い売上も記録して、最後ののみの市は見事大成功だった。

今回ののみの市を通じて、私は仲間の大切さを強く実感した。自分一人ではとても出来ないと感じることでも、頼れる仲間が沢山助けてくれたお陰で乗り越えることができた。このメンバーで最後ののみの市に取り組めて良かったです。保護者の皆さん、のみの市に関わってくださった方々、そしてクラスメイトのみんな、本当にありがとうございました。



蚤の市

高等部二年一組　井手　俊

これまでのんびりと過ごし、随分と気楽にやってきた蚤の市であったが、それもとうとう最終年となってしまい、瞬く間に終わってしまった。

ただし、今年は忙しかった。我々高二がクレープを作るのはもはや伝統である。つまり、どんな省エネ企画をしようと（もっともそのようなことをしたら恥だが）クレープ作りから逃れられない。それも、何百人分というスケールだ。会長が「三百枚作ろう」と言った時は唖然とした。出来る訳ない、雑貨やゲームで補えばいいと思ったのだが、なんと本当に三百枚作ってしまった。普段、毎週数人かは必ず欠席者が

出る高二だが、とんでもない団結力を発揮した成果だったとしか考えられない（睡眠を犠牲にしてだが）。

この底力は一体どこから湧き出てきたのか。多分、それは信頼だと思う。大変決まり文句ではあるが、自分のクラスメートのほとんどとは大変長いお付き合いだ。いつの間にかクラスも一つにとどまり、同じ顔ぶれと一緒に登校するようになっていた。新入生とも何故かすぐに仲良くなった。

当然だが自分は現地校にも通っている。しかし、米国滞在が長いばかりかそこでの友達はほとんどアメリカ人で、英語しか喋らない。いつしか日本語を喋る機会があるのは自分の家族と補習校しかなくなってしまった。つまり、自分のクラスメートは単なる友ではなく、ここまで日本語、日本人というアイデンティティーを保つことができた理由なのだ。だからこそ、そう信頼をおくことに躊躇がないのだと思う。高二まで補習校に行ったからにはクラスメートも同じ状況なのだろう。この信頼こそが、今年の蚤の市の最大の柱となっていた。

この「信頼」に至るまで、どれだけの時間がかかったか。日本へ帰国する者、引っ越す者などもう見慣れてきた。だからこそ、今後もこの高二を大切にしていきたい。２０２３年度の蚤の市、唯一の悔いはこれに早く気づけなかったことである。

